

宰府画報

第27号

2025年7月
(令和7年)発行
太宰府市教育委員会
文化財課

バックナンバーはこちらから

逸品探訪

吉嗣家資料

群獣図

吉嗣梅仙作

象、牛、馬、熊、猿、猪、虎、鹿、羊、エトセトラ。

動物園さながらの様々ないきものが、背景のない空間に大集合。当然ながらこれらの動物たちが自然界で一堂に会することはありえませんし、牛の手前に描かれる鼠と大ききの対比などにはずいぶんと違和感もあります。そこは絵空事のごあいさよう。画面下方の動物を比較的大きく、上方では小さく描くことで奥行きや広がりを表し、向かって左側の動物は右向き、右側の動物は左向きに描くことで視点を中央に寄せて、画面はお

さまりよくまとめられています。最上部に描かれるのは泰平の世に出現するという想像上の動物、麒麟。あらためて画面を見ると、動物たちは穏やかな雰囲気です。この穏やかな雰囲気は動物たちが争う様子を描いていないというだけでなく、丸々とした肉付きや柔らかな毛並みの表現から感じられるものであり、本作の場合は、黒目が大きくぱつちりとした眼の表現によるところも大きいと思います。

藤秋圃の動物画に見られるもので、本作の筆者吉嗣梅仙が秋圃の作風にならったものとわかります。梅仙は画業初期に秋圃に学び、のち諸家を学んでとくに周防出身の画家小田海仙の作風を慕ったと伝わり、吉嗣家資料には海仙画の模写を参考にして最晩年に制作された作品が現存しています。75歳の落款をもつ本作は、梅仙が秋圃から小田海仙の作風へと意識を置き換えたのではなく、秋圃の作風も終生慕いながら画技を磨いていたことを示すものとして貴重です。(井形栄子)



絹本着色 掛幅装 105.0 × 42.1cm 明治24年(1891)

査 見 調

齋藤秋圃の作風のルーツ

— 京絵師・河村文鳳との親近性 —

円山四条派に学びと伝わる

齋藤家資料調査と報告書の刊行によつて秋圃研究は大きく進展しているところですが、彼の画風形成期すなわち秋圃が上方にいた頃にどこでどのように絵を学んだのかについては、まだ研究の余地が残されています。伝記や現存作品の作風から秋圃は円山四条派を学んだとされ、確かに齋藤家資料中には応挙や呉春といった円山四条派の絵師の名を記した画稿があります。しかし資料中には狩野派や土佐派、浮世絵にならったものも散見され、これらの資料が秋圃の活動期のいつ写されたのか、また秋圃の画技との関係の深淺については検討せねばなりません。

『葵氏艶譜』と『文鳳簾画』

上方時代の秋圃については、江戸文学研究の大家であった中野三敏氏（1935～2019）によつて様々な事蹟や人脈などが明らかにされ、初期作品のひとつである『つばものつくし』のモチーフが、江戸の浮世絵師・鵜形蕙斎（1764～1824）が手がけた『略画式』という絵手本から複数サ



河村文鳳『文鳳簾画』（部分）寛政12年序
国会図書館デジタルコレクションより



齋藤秋圃『葵氏艶譜』（上巻）享和3年序
福岡市博物館本

ンプリングされていることが指摘され、秋圃の学習の一端が知られます。

さて今回は、蕙斎とは別に、河村文鳳（1779～1821）という京都の絵師についてふれたいと思います。秋圃より7歳年少の文鳳は、虎図で有名な岸駒に学んだ京都の人です。43年の短い生涯だったにも関わらず絵手本の類を多く手がけて人気を博した有力者だったと伝わります。

この文鳳の絵手本のひとつ『文鳳簾画』（寛政12年（1800）序）の中に、秋圃の出世作である『葵氏艶譜』（享和3年（1803）序）の宴席の様子を描く一図とよく似た図があり（上写真）、人物の細かな配置は異なるものの、蠟燭の炎が右上がり、細く鋭く表される点や、左手に煙管を持つてこちらを向く男性が右肩を大きくすくめる表現、また三角形の構図の中にモチーフを配置する画面構成など、いくつもの共通要素が見い出せます。

同じ絵本で競演

絵師が絵手本の図様を相互に利用するのは珍しいことではありませんが、文鳳の絵の雰囲気は蕙斎よりも



齋藤秋圃「花盗人図」



河村文鳳「ほうろく鼓図」

『都会帖』（部分）享和3年序
石川県立図書館デジタルコレクションより

秋圃に親近感があるように思い、秋圃の初期作品を見直していたところ、『葵氏艶譜』と同年の序を持ち、秋圃の絵が収録される絵俳書（挿絵入りの俳諧本）『都会帖』に文鳳の絵もあることを再確認しました（左写真）。大坂の秋圃と京の文鳳、原画を描いた場所は異なっていたでしょうが、ふたりが同じ時期に、近しい環境で制作活動を行っていたことが推察されるのです。

『都会帖』には秋圃と文鳳のほか、東虎、九老、白猷、壺仙、梅溪、一甫、甫尺、南浦、楠亭の、総勢11名の絵師の絵があります。人物のプロポーションや柔和な雰囲気、対角線を意識した画面構成など、文鳳以外の絵師にも秋圃との造形感覚の共通性を感じられ、『都会帖』は上方時代の秋圃の動向や作風のルーツを探る手がかりになります。（井形栄子）

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料

大江山鬼退治図



紙本墨画淡彩 5枚のうち1枚 26.4 × 307.2cm

大江山絵巻は、平安時代の武将である源頼光が家来の渡辺綱、坂田公時らを引き連れ、都から女性を誘拐する悪事を働いていた酒呑童子を退治するという架空の物語を描いたものです。最

も有名な作例は、室町時代の制作で重要文化財の狩野元信筆『酒呑童子絵巻』3巻(サントリ美術館所蔵。以下、元信本)で、この作品から派生した模本や作品が多々存在します。

本画稿も、図様としては元信本の系統にあたるものです。貼り継いだ横長の和紙5枚に、元信本の上・中巻の絵が十数場面写されています。今回掲載しているのは、山伏の格好をして酒呑童子の住処を訪ねた頼光一行が、童子を退治するために毒酒を飲ませ泥酔させようとする場面です。扇をもち舞い踊り、童子の大杯に酌をし宴席を盛り上げる頼光一行。周囲を童子の家来である異形の鬼たちが取り囲んでいるさまからは、奇怪な屋敷の様子がうかがえます。

本画稿の絵画表現は、元信本の狩野派の絵画表現に比べると、丸みのある筆線で親しみのある描写となっていることが特徴です。絵師の家に備えるべき画題のひとつとして、齋藤家に収集された画稿であることが想像されます。(日野綾子)

メイショ
メイブツ

中島神社の石碑と鳥居



「菓祖中島神社」と彫られた石碑

太宰府天満宮の回廊東側には、ゆかりのある摂末社(小規模神社)が複数並んでいます。その中でも一際大きな社殿と鳥居を有するのが中島神社です。お菓子の神様である田道間守命を祀っており、九州菓業の守り神として信仰を集めています。本社は兵庫県にありますが、九州における菓子業の守護神として昭和29年(1954)7月に分霊分社されました。

と刻まれており、この石碑が文人吉岡鼓山の書であることが分かります。

また、石段を登った先の鳥居には石碑と同じ書体で「昭和廿九年参月吉日」と刻まれており、鳥居の文字も鼓山の揮毫だと考えられます。鳥居の完成が昭和29年の3月、石碑も含めた全体の落成は同年7月なのだと推測できます。

太宰府天満宮の隣に居を構えていた吉岡家は、境内で展覧会や揮毫をするなど天満宮と深い繋がりを持っていました。多くの作品を遺した吉岡家の足跡をここにも見ることができます。(木村純也)



石段を登った先にある鳥居

関係者
名鑑

Vol.7

おうやばい
王治梅

生没年 道光9〜不明（1829〜？）
関係者 吉嗣家

プロフィール

清末の画家。名は寅、治梅は字。江蘇省江寧の出身。太平天国の乱により故郷を逃れ、上海に至り書画をなりわいとした。上海を訪れた日本人は治梅の書画を争って買い求めたという。また上海にいた日本人の勧めによって日本へも渡航しており、その来日は3度に及んだ。

以前の本紙『宰府画報』第7・23号）でも紹介したように、吉嗣拝山が清に渡航したのは明治11年（光緒4年、

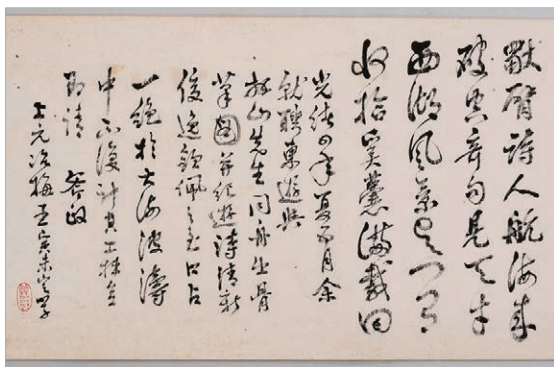


図1
〈骨筆題詠〉部分図 吉嗣家資料

1878）3月のことでした。『日間些事記』によると、拝山は上海に入ると早速に、上海で活躍していた文人たちと交遊しています。そのなかに銭子琴・陳子逸・馮耕三とともに王治梅の名前もみえます。治梅は明治10年に、日本に最初の渡航をしていましたが、病を得て上海にもどっていたのです。

明治11年6月、治梅は拝山が帰国する船に同乗して、2度目の来日を果たします。その船中で拝山の骨筆、清国滞在中の漢詩を覽じて、漢詩を詠んでいます（図1）。拝山はこの時の様子を先の日記に「舟中に王治梅と筆談す。頗る快を極む。」（図2）と記しており、二人の深い交遊の姿を窺うことができます。（重松敏彦）

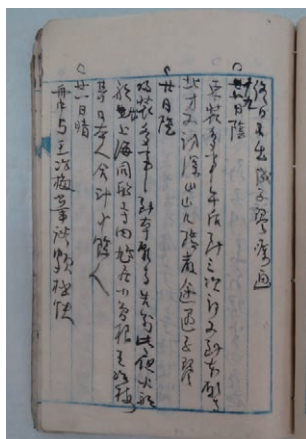


図2 『日間些事記』 吉嗣家資料

ひとこと
くずし字

【猛虎一声山月高】

今回は漢詩の一節をもとに作られた印章をご紹介します。「猛虎一声山月高」と3行にわたり刻まれ、篆書体のため象形文字ともいえるような一見すると読みにくい文字になります。1行目「虎」は異体字の「𧈧」、2行目の「声」は旧字体「聲」をあらわしたもので、3行目真ん中の「月」は「夕」に見えます



が、「山月高」と何とか読めます。

これは北宋の詩人俞紫芝の「蒋山の栖霞寺に宿りて」という漢詩の一節で「猛虎一声し山月高し」と読みます。ある夜、どこからか虎の鳴き声が聞こえ、辺りを見回すと山の上に月が輝いている様子を表現したものです。

近代では墨書等で扱われることのある一節で、吉嗣家の文人も虎の画題や書を作成した際に使用したのかもしれない。

印面に彫られた虎は、猫と見間違えるほど可愛らしいですが、意味を知ると、天に向かって吠える虎の猛々しい様子が伝わってきます。

直径2 cmほどの透明な水晶に文字と虎を彫りこむのは至難の技でしょう。200点以上ある吉嗣家の印章でも、文字以外が刻まれるのはこの資料だけです。（木村純也）



この資料

印面 2・1×1・9 cm
総高 3・0 cm
材質 水晶
吉嗣家資料

編集後記

偶然ですが、動物（群獣図）に始まり、動物（虎）に終わる回でした。次回は期待の新人が登場。乞うご期待（木）
空調が壊れて灼熱地獄の調査室。在宅仕事は涼しいけれどウナギ上りの電気代。前門の虎と後門の狼と闘っています。（井）